
肝だめし.....？

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肝だめし……？

【Nコード】

N1316A

【作者名】

クノウ

【あらすじ】

最終兵器彼女のちせとシュウジ達が肝試し！

キンコーンカーンコーン……

今日最後の授業が終わった

帰り支度をしていると

「おーい、シユウジ。あの話聞いたか？」

アツシだった

「なんだよ突然。それにあの話って何だ？」

「ああ、何でも裏山に“出る”らしいんだよ。」

「何が。」

「幽霊。」 ドカツ

「それで？」

「殴らなくてもいいだろ？」

「ああ、わりい。それで、どんな幽霊なんだ？」

「それはな、夜になると怪しい人影が出たり、木が光ったり、うめき声が聞こえたりする、といったことがあるらしいんだよ。」

「なんだか在那里来たりだな？それに、初めて聞いたよ、そんな話。」

裏山とは、もちろん展望台のあるあの丁山のことだ。何度となく足を運んだが、そんな物を見たことは一度もない

「それで、その幽霊がどうかしたのか？」

「みんなで肝試ししないか？」

始まりはこの一言だった

「みんなそろってろ？」

夜の校門前。肝だめしに集まったのは、俺にアツシ、タケノリ

ちゃん、アケミ、ちせ、せいこ、フミコの八名。

ちせを誘ったのはアケミだ。おそらく、面白がって何も伝えてないのだろう

「ねえ、シュウちゃん。これからみんなで何するの？アケミには皆で遊ぶって言われて来たんだけど。」

「まっ、今に解るだろ。」

「？」

そして、裏山の方へと移動していく。歩くこと20分程、門の前についた。進入禁止の門だ

「なんだか、マジで出そうだな……」

「あ、ああ……やっぱり夜の森って、こう、なんか不気味だな。」

「タケ、ノリちゃん、もうびびってんのか？これから、ここに入っていくんだぞ。」

そう言い出したのは、言い出しっぺのアツシ

（足が震えてるぞ……）

「そうよ、あんた達それでも男か？まだ入ってもいないのに怖がってんじゃないよ。」

と、アケミのきつい一言

「やゝね、頼りない男は。」

「そうそう、かっこ悪いわ。」

せいことフミコのとどめの一撃

「そっそんなことねえよ。不気味だっただけじゃねえか。」

「うん、そうそう……」

そのとき、観戦モードに入っていたちせが、俺のところに来た

「ねえ、しゅうちゃん。もしかして、今日ここに来たのって……」

皆の会話で、ようやく今日の目的に気づいたようだ

「ああ、今日ここに来たのは……」

『肝試しだ（よ）……！』

「「うわあ！？」」

突然アケミとアツシに声をかけられ、（しかも顔をライトでアップさせて）驚いてしまった

「あたし帰る！」

ガシッ

「だめよ、ちせ。帰ったりしちゃ。」

「アケミ、離してよ。あたしがこういうの嫌いなもの知ってるのに。」

「当然よ。だから、詳しいことは何も言わずに誘ったんじゃない。」
「う。」

ちせが俺のほうを睨んでくるが、大して怖くない

「大丈夫よ、ちせ。いざとなったらシユウジにでも抱きついて守ってもらえば。あ、そっちの方が危ないかな？」

「えっ!？」

「なっ!？」

「そんな恥かしいことするか!!ちよつと来い、ちせ。」

「あ、待つて……」

「どうしたの?シユウちゃん。」

「ちせ、そんなに怖がるなよ。この山には何度か来たことがあるだろ?一度でも幽霊を見たことがあるか？」

「ないけど……」

「だいたい、怪しい人影とか光る木なんて、大方見間違いだろ。気にすんなって。それに、お前なら何かあつたら分かるだろ?様子が変だとか誰かがいるとか。」

「それは分かるけど、お化けなんか探知できるかどうか……」

あくまでもお化けが怖いらしい

「だから大丈夫だよ。こんな山にそんなもんいねえって。今まで聞いたこともないんだ、きつと見間違いに決まってるさ、それに……あ。」

「それに?」

「いや、なんでもない。」

「気になるよ、シユウちゃん。」

「気にするな、行くぞ。」

「ぶ」

（言えるかよ、守ってやるだなんて恥かしいこと……）
こうして皆は、森の奥へと足を踏み入れていくのであった
この先に待ち受ける恐怖？も知らずに……

ザッ　ザッ　ザッ　ザッ

静かな森の中に、二人の足音が響く

ザッ　ザッ　ザッ　ザッ

「……………」

「……………」

二人とも緊張しているのか、無言で歩いている。

いや、正確には一人は怖がっていて、もう一人は別の意味で緊張しているだけだった

ヒュ〜

ガサガサ……

「キャッ!?!」

「うわっ!?!」

風が声のようにでも聞こえたのか？それとも木々の揺れる音を何かと勘違いしたのか、女は男にしがみついた。

もともと怖がっていたため腕を掴んで歩いていたが、今度はそれ以上で密着状態となった

「あつ！ご、ごめん……。」

「い、いや、別に大丈夫だからさ……。」

ほんとにどこまでも不器用な二人である。傍目から見ても絶好のシチュエーション。

作者としては、こう、赤くなつてないで勢いに任せてキスぐらいしやがれっ！！　ってな感じだ。

だいたいこの二人、何でここにいるのか忘れていないだろうか？

ここには、『肝試し』をしに来ていた事に。無駄にいい雰囲気をもし出している場合ではない

この肝試しは、二人一組になつて例の展望台に行き、その証拠に予め用意しておいた目印を置いてくるというものだった。

シュウジとちせのペアは、くじ引きの結果最後となった。

「おい、ちせ。そろそろスピード上げるぞ。みんなを待たせちゃうからな。」

「うん…。」

ザッ　ザッ　ザッ　ザッ

ザッ　ザッ　ザッ　ザッ

少しは早くなつたようだが、それでもまだ歩く早さはゆっくりである

（はゝ、幽霊なんて居ると思えないけどな。さつさと展望台まで行つてみんなのところに帰らないと…

それにしても、兵器のくせしてちせも怖がり過ぎだよな。…まあ、そんなところが可愛いんだけど。）

シュウジがそんなことを考えているときちせは

（うゝ！！　こっ、怖いよゝ（泣）　お化け怖いゝ　早く展望台に

着かないかなゝ　距離はあと、約1.5kmか…　まだ長いよゝ

で、でも…シュウちゃんと二人つきり…（ポッ）

どこまでもおめでたいカップルだった

しばらくして展望台が見えた。

「シュウちゃん！ほら、着いたよ！！」

「分かつてるって。ほら、目印をおいて早くみんなのところに戻るぞ。」

「うん！！」

そして引き返すこと5分ほど…

ガサガサツ！！

「！！！？」

「シュウちゃん、何？今の音…」

「な、何って、虫か何かだろ。気にし過ぎだって。」

「う、うん。」

でも、それから一分もしないうちに…

プシュツ　バサバサツ！！

「！！！？」

「今は気のせい…じゃないよね？」

「狸かなんかじゃないのか？」

「でも、そこには生命反応がなかったよ。」

「……………」

「シュウちゃん…、シュウちゃんもやっぱり怖いのか？」

「！！？　そんなはずないだろ！！？」

「でも、シュウちゃんの心拍数かなり上がってるよ？すごいドキドキしてる。」

「そ、それは…。」

確かに、幽霊を信じていないとはいえ暗い森の中で突然変な音がすれば誰だって驚くし、鼓動も早くなる。

でも、シュウジがドキドキしている大半の理由は…

（だ…っ！！ちせが驚くたびにいちいち抱き着いてくるからだよ！

！しかも、その、胸が腕に（赤）…）

てな理由だったりする

……………

.....

それからどれくらい時間がたっただろうか

実際にはそれほど時間はたっていないし、後十分も歩けばゴールに着く距離だろう。

ただ、二人っきりのこの状況が二人の時間の感覚をおかしくしていた
「もう少しでみんなのところだな、ちせ。」

「うん。」

「それにしても、結局変な音がした以外は何も起こらなかったな。
やっぱり幽霊騒ぎも嘘だったんだな。」

「うん。怖がってそんしちゃった。」

「ほら、さっさと行こうぜ。」

そう言って足を進めたときだった。

『うわー！！！！！！』

『キャー！！！！！！』

「.....。」

「うん、何も聞こえなかったよな、ちせ。」

「そ、そうだよシュウちゃん。何も聞こえなかったよね。」

今の声は、前の組のアツシとアケミのような気もしたが、気のせい
ということにした。

「シュウちゃん、あっちに誰がいる！！」

「えっ！？」

言われた方を振り向くが、俺には何にも見えない。見えるのは木だけだ。

「シュウちゃんの目じゃ見えないよ。まだ300mは先にいるから。」

「

「そうか。で、こんな夜遅くに俺たち以外に誰がいるんだ？」

「そこまでは分からないけど、こちらに三人ほど近づいてくるよ。」

「…人だよな？それ……。」

「うん。人間の生態反応だけだよ。」

「……………」

「……………」

「大丈夫だよな？」

「多分……」

行動は決まった

「急ぐぞ、ちせ。」

「あつ、まって…きゃっ!？」

「うおっ!？」

ドサッ

慌てたちせが転んでしまい、前にいたシュウジも押し倒される形で転んでしまった

「おい、大丈夫かちせ？」

「うん。あたしは大丈夫。でも……」

「?」

「さっきの人たち、もうすぐそこまで来ちゃってる。」

確かに、ライトがもうすぐそこにちらちらと光っている

「まさか、さっきの悲鳴も……」

「シュ、シュウちゃん……」

ちせは怯えている。

俺はちせの前に回りこむようにもうすぐそこまで来ているであろう人影の前に立ちはだかった。

ガサガサガサッ!!

すぐそこで音がした。

「だ、誰だ!？」

森の中にライトをかざして叫んだ
だけど、そこから返ってきた声は

「おいおい、何でここに一般人がいるんだ? 一応自衛隊の敷地内だ
ろ?」

ただの自衛隊員だった

「ん? 何だ? こっちは寒い中訓練だつてのに、彼女と真夜中のデー
トか? それなら他のところに… って!?!? ちせ!?!?!?」

どうやら、ちせのことを知っている人だったようだ。というか…

「テツ先輩!?!」

「なんだ、誰かと思つたらお前シウジか? ということは、ちせ
の彼氏つて… お前もなかなかやるな。」

妙に納得しているテツ。

だが、そのときまた後ろから…

「テツ二尉、早すぎですよ。」

「そうですね、置いて行かないください。あれ? そこにいるの
はちせちゃん?」

順にリョーヘイ、ナカムラだった。

「あつ、どうも…」

と、ちせが挨拶すると

「どうしたんですか、ちせさん? こんな夜遅くに。」

「あつ、もしかして俺達が訓練してるって知って応援に来てくれた
の? いや、嬉しいよ、ちせちゃん。ところで、」

「こっちの人は?」

あらかた話し終えた二人の自衛隊員が、俺のほうを指差した

「あつ、その… シュウちゃんです。あたしの彼氏の…。」

ちせは真っ赤になって俺のことを紹介した

「えっ?!?!?!?!?!」

「この人がちせさんの彼氏ですか？」

「お前！俺のちせちゃんを」（怒&泣）」

ポカポカッ

「手前ら、何情けない顔してんだ！！自衛隊員ともあるうものが、
よりもよって俺の後輩の前で。しかも、上官に向かってタメ口を
きくな！！」

この国の未来を、こんな人たちに預けていいのものが不安になって
しまった

「とりあえず、二人はこんなところで何してたんだ？」

「それが、クラスのやつに最近ここで幽霊騒ぎがあったから肝試し
しないかって誘われて。」

「それで、戻る場所だったのか。」

「はい。」

「それで、何か変わったことはあった？二人とも。」

「いえ、特に変なことは…」

「途中で何かが当たって葉っぱが揺れる音がしたぐらいです。そう
言えば、小さく銃声もあったかも。」

「ああ、たぶんそれは俺達だよ。訓練で模擬弾使っててさ、といっ
ても模擬弾も勿体無いからってこの通りエアガンだけだね。」

そういつて後ろの森に弾を数発撃ってみせる

「なんだ。じゃあ、最近噂になってる幽霊って自衛隊の人だったん
ですね。怪しい人影とかうめき声は訓練で歩いてたのを見間違えた
とか。」

「じゃあ、光る木は何なのかな？」

「光る木？それはアレだろ。」

「アレ？」

「ちせのことだ。」

「あたしですか！？」

「そうだよ、ちせちゃん。結構噂になってるんだよ？前、ここに来る途中の坂で兵器の力を使ったでしょ？その辺りの道は見晴らしがいいからね、その時の様子を下んの方から見た人がいるんだよ。それが『光る木』に見えたってわけ。」

「そうだったんですか…。」

「やつぱり、幽霊なんているわけないよね、シュウちゃん。」

「ああ。」

「そういう事だ。じゃあ、お前らも気をつけて帰れよ。」

「気をつけてください、ちせさんとその彼氏さん。」

「じゃあね〜ちせちゃん。」

そうして三人は行ってしまった

「じゃ、早く戻るか。」

「うん。」

どちらからというわけでもなく、二人は手をつないで戻って行った

そして〜

「ちよつと、聞いてよシュウジ。この男どもは、女のあたし等よりもみんな先に逃げ出したのよ。」

「ほんと。『俺に任せとけ！』とか威張ってたのに、いざとなると逃げ出すなんて…。」

「かなり見損なったわ。まったく頼りがいのない。」

アケミの悲鳴は、アツシの悲鳴とその驚いた顔に驚いたというものだった

「だらしないな、お前ら。俺たちは別になんともなかったよな、ちせ。」

「うん。」

「へー、ずいぶんと余裕だったのね。面白くない。」

「あのなあ……」

と、そのとき

「なあ、… シュウジ……… お前、その背中……」

「ん？背中？」

シュウジが背中を見てみると…

「うわー！！！！？？？」×8

真っ赤な手形がベツトリとついていたそうなの…

終わり

（後書き）

< font size = 2 > ちよつとオチが弱い気がします。がまあ、気にしないでください。

もうちよつとシリ阿斯ホラーにしようとも思いましたが何となくこんな感じで終わってしまいました。

リョーヘイとナカムラの出番の少なさが自分としては悔やまれます。もう少し出したかった…。 < / font >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1316a/>

肝だめし.....？

2010年10月12日03時00分発行